

テモテ第一3章14節－4章5節 「信仰と真理」

1A 真理の柱 14－16

1B 神の家 14－15

2B 敬虔の奥義 16

2A 信仰からの背教 1－5

1B 惑わしの霊 1

2B 感謝して受け取るもの 2－5

本文

テモテへの手紙第一 3 章を開いてください。私たちの学びは、3 章 14 節からになります。前回、私たちは教会において仕える監督また執事の資格を見ていきました。このどちらもが、地道で、時に地味な働きであります。パウロはこの働きが監督については「すばらしい仕事(1 節)」であり、執事については、「良い地歩」を占める(13 節)と言って、荣誉ある働きなのだと言って、励ましています。そしてパウロはテモテに、この手紙を書いた目的を次に話しています。

1A 真理の柱 14－16

1B 神の家 14－15

14 私は、近いうちにあなたのところに行きたいと思いながらも、この手紙を書いています。15 それは、たとえ私がおそくなったばあいでも、神の家でどのように行動すべきかを、あなたが知っておくためです。神の家とは生ける神の教会のことであり、その教会は、真理の柱また土台です。

パウロは、マケドニヤに出発する時にテモテにエペソに留まるようにさせました。けれども、別れた時に教会においてどう行動、あるいは指導していけばよいかを十分に教えていませんでした。間もなくエペソに戻ることができると思っはいたものの、遅くなった時のことを考えて、手紙によって早めに伝えておいたのです。

パウロは、監督や執事について教えた後で、教会とは何かについて教えています。それぞれの地域に置かれている教会が何であるのか、それを思い出すことは大切です。パウロは三つの言葉でそれを言い表しています。

まず、「神の家」と呼んでいます。監督の資格として、パウロはテモテに「3:5 自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう。」と教えました。それは、教会が神の家族だからです。教会の仲間について、使徒たちは「兄弟」という言葉を使いました。神を父として、私たち一人一人が神によって生まれたから、私たちは互いに兄弟であり、姉妹です。「ヨハネ 1:12-13 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々に

は、神の子どもとされる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。」

ですから、私たちの教会における営みは、家族のようではなければならないということです。前回の学びで話しましたが、家族というのは、いつもと変わらない姿、再び会って喜びをもった姿、そうしたものに喜びがあります。教会から教会を回っている人は、グルメのようにしてご飯を食べているかもしれませんが、家族を知っている人は自分の家庭料理にある美味しさを知っています。パウロは5章で、いろいろな人々にどのように接するべきか教えています。「5:1-2 年寄りをしかつてはいけません。むしろ、父親に対するように勧めなさい。若い人たちには兄弟に対するように、年とった婦人たちには母親に対するように、若い女たちには真に混じりけのない心で姉妹に対するように勧めなさい。」

家族において、何をするか？今、話しましたように、私たちはそこで食べ物を食べ、養われます。同じように教会というのは、神を父と仰いで、父から養いを受けるところであります。その食べ物はもちろん、御言葉です。御言葉による養いを、私たちは受けて、受けて、受け続けなければいけません。4章6節には、御言葉を教える牧会者自身が、その養いを受けていくことについて教えています。「これらのことを兄弟たちに教えるなら、あなたはキリスト・イエスのりっぱな奉仕者になります。信仰のことばと、あなたが従って来た良い教えのことばによって養われているからです。」そして、家族には躰が必要です。子が育つには、時に戒めも与えます。ですから教会には、戒めが書かれています。パウロは、信仰から彷徨ってしまったヒメナオとアレキサンデルについて、こう言いました。「1:20 私は、彼らをサタンに引き渡しました。それは、神をけがしてはならないことを、彼らに学ばせるためです。」サタンに引き渡すとは、教会に属していることによって守られている覆いを外して、サタンの影響下の中にいさせることであります。教えに聞き従わない人は、このように交わりから引き離されます。しかし、それはその人が滅びるためではなく、むしろ悔い改めて、救われるためです。そして家族には、模範が必要です。子は親を見て育つと同じように、生活の中で信仰をどのように生かしていくのか、その模範を見せることによって育ちます。ですからパウロはテモテに、信者の模範になるように教えています。「4:12 年が若いからといって、だれにも軽く見られないようにしなさい。かえって、ことばにも、態度にも、愛にも、信仰にも、純潔にも信者の模範になりなさい。」

そしてパウロが語る地域教会の姿は、「生ける神の教会」です。「教会」という言葉、これは中国語、韓国語、日本語の聖書における訳ですが、本来は「エクレスシア」というギリシヤ語で、「集会」という意味です。政治集会などの集会に、呼びかけを受けて集まる、そうした意味が元々のエクレスシアです。召集をかけられる、つまり「召し出される」という意味合いのある言葉です。パウロはこれを、「生ける神の教会」と呼んでいます。生きた神に呼び出された、召し出されて、集まっているのだという意味で話しています。教会というのは、徹頭徹尾、神に選ばれて、神に呼ばれる「召し」によって成り立っています。「ヨハネ 15:16 あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしが

あなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。」自分が選んだのではなく、イエスご自身が選ばれました。だから自分が主体ではなく、神が主体です。自分が責任を取るのではなく、神が責任を取ってください。自分は主の言われることに聞き従うことに責任がありますが、その結果は神が責任を取られるのです。

そして、パウロは三つ目に教会を、「真理の柱また土台」と呼んでいます。



エペソには大きなアルテミスの神殿がありました。アルテミスとは女神で、エペソの人たちは熱心に拝んでいました。使徒の働き 19 章で、アルテミス神殿の模型を作っている銀細工人が、パウロの宣教によって多くの者がその偶像を捨てたので、自分たちの商売が上がったりなので騒動を起こしたのを覚えているでしょうか？この神殿は現在では

原形をとどめていませんが、当時は世界の七不思議にかぞえられていて、長さが 115 メートル、幅 55 メートル、高さは 18 メートルもあり、それが 117 本の柱で支えられており、総大理石で作られていたと言われていました。それは紀元前 7 世紀に建てはじめて 200 年かけてやっと完成したほど立派な神殿だったそうです。パウロはおそらくこのことを考えて、「真理の柱また土台」と呼んでいるのだと思います。

「土台」については、パウロは他の手紙でも教会について数多く語っています。まず、イエスご自身がペテロに教会について語られる時に、「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。(マタイ 16:18)」と言われました。ペテロが、「あなたは生ける神の御子、キリストです。」と告白した、その信仰告白の上に教会が建てられます。パウロが、コリントの人たちに対してこう語りました。「1コリント 3:10-11 与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。そして、ほかの人がその上に家を建てています。しかし、どのように建てるかについてはそれぞれが注意しなければなりません。というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。」イエスご自身が神の建物の土台です。その上にどのように建てるかは、各自が注意しなさいと彼は諭しています。

パウロは、他の箇所でも教会が神の建物であることを教えていますが、ここテモテへの手紙の特徴は、「真理の柱」と呼んでいることです。教会はこの真理によって成り立っているのだ、ということが自分たちの内で分かるだけでなく、世に対しても、教会の外に対しても分かる形になっているのだということです。イエス様が言われました。「マタイ 5:14-16 あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。また、あかりをつけて、それを柵の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」

しばしば起こるのは、「信条としては受け入れているが、公に明らかにしていない。」という問題です。私たちが、信仰をもって真理を受け入れ、それを口に出して宣言していくのです。あるいは、「信条としてあるのに、他の事柄が中心になっていて、見てもその信条を信じているのか分からない。」ということが起こります。使徒パウロが、エペソの長老たちにこう言いました。「使徒 20:27 私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。」神のご計画を明らかにしていくのです。

2B 敬虔の奥義 16

16 確かに偉大なのはこの敬虔の奥義です。「キリストは肉において現われ、霊において義と宣言され、御使いたちに見られ、諸国民の間に宣べ伝えられ、世界中で信じられ、栄光のうちに上げられた。」

パウロが、違った教えが教会内に入り込んでいたことを対処していたテモテに対して、これだけはしっかりと保持していなさいという根本真理を教えてください。「確かに」というのは、直訳は「一致した意見ですが」となっています。ここに書かれているのは、教会によって意見が異なるものではないということです。意見の多様性の余地はない、これを除いたら我々の信仰そのものがなくなるということです。おそらくここにあるのは、初代教会における短い信仰告白の信条、あるいは讃美歌であったのではないかと考えられます。かつては、新約聖書はもちろん存在しないですが、旧約聖書も一部の指導者が巻き物として持っていただけで、それをいつも手に出来た訳ではなく、それで信仰を告白する時に短い信条を、讃美にして唱えていたと考えられます。

そして、これが「偉大なこの敬虔の奥義」とあります。偉大な真理です。この真理の言葉こそが、神の人になることのできる敬虔を生み出します。パウロはテモテへの手紙で、「敬虔」について多く教えてください、それをもたらすものが敬虔の奥義です。「奥義」とは、過去は隠されていたが今は明らかにされている真理です。キリストと教会の関係についても、パウロは同じ言葉を使いました。「エペソ 5:31-32「それゆえ、人はその父と母を離れ、妻と結ばれ、ふたりは一心同体となる。」この奥義は偉大です。私は、キリストと教会とをさして言っているのです。」旧約聖書の中において、敬虔についての教えが、実は、キリストのご性質や働きの中にあるのだ、ということが明らかにさ

れました。周りの人々はこれをすればよいであると言って、論議や議論の中に入り込んでいるのですが、敬虔の奥義はキリストの内にあり、初めから聞いている神の救いのご計画の中にあるということです。

具体的に六つのことが書かれています。第一に「キリストは肉において現われ」とあります。ギリシヤ語によっては、「神は肉において現われた」とあります。「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。(ヨハネ 1:14)」受肉であります。キリストが肉体を持たれていることで、私たち肉体を持つ者と一つになってくださいました。そのことによって私たちの祭司となり、私たちの肉体にある弱さに同情することができます。私たちのとても小さな事柄でさえも、主は憐れみ、助けることのできる方であります。そして肉体を宿しているからこそ、私たちの罪のための供え物となることがおできになったのです。私たちの罪の罰を、その肉体の上に受けることができたのです。

第二に、「霊において義と宣言され」とあります。これは人の霊ではなく、神の霊、御霊のことです。御霊によってイエス様が義と宣言されました。イエス様がなされていることが、神の御霊によって正しいと宣言されていることでもあります。主がヨルダン川でバプテスマを受けられた時に、聖霊が鳩のように下ってこられました。そこに天からの声が出て、「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。(マタイ 3:17)」と神からの認証がありました。そして、聖霊によって数々の奇跡を行われました。そして何よりも、聖なる御霊によってイエス様は死者の中から甦られたのです。死者からの復活によって、この方が言われたことが確かに正しいと証しされたのです。「御子に関することです。御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ、聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方、私たちの主イエス・キリストです。(ローマ 1:3-4)」

第三に、「御使いたちに見られ」とあります。御使いは、神に仕えている霊です。天において、神に仕えています。彼らが最も気になっていたのは何か、誰かと言いますと、イエス様だったのです。「そして今や、それらのことは、天から送られた聖霊によってあなたがたに福音を語った人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのです。それは御使いたちもはっきり見たいと願っていることなのです。(1ペテロ 1:12)」御使いは、イエス様が誕生された時に、いやその前から関わっていました。母マリヤにその受胎を告知したのは天使長ガブリエルです。そして、イエス様がバプテスマを受けられた後、荒野で四十日、何も食べないでいて悪魔の誘惑を受けられましたが、御使いがイエス様に仕えていた、とあります(マルコ 1:13)。ゲッセマネの園で、イエス様が苦しみ悶えて祈られた時に、「御使いが天から現われて、イエスをかづけた。(ルカ 22:43)」とあります。そして、イエス様が墓から出てきた時に大地震が起りましたが、そこには眩いばかりの衣を来た人が二人いました(ルカ 24:4)。イエス様がオリーブ山から昇天された時も、二人の人がいました。このように、天における焦点はイエスご自身であり、この方のなされる一つ一つのことだったのです。

第四に、「諸国民の間に宣べ伝えられ」とあります。ここで大事なものは、ユダヤ人だけでなく諸国

民であること。すべての民に伝えられたという事実です。言い換えれば、神は全ての人のためにキリストを遣わされたということです。神は全ての人を救うことを願われています。そして第五に、「世界中で信じられ」とあります。信じるということが強調されています。「ローマ 1:16 私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」キリストに拠り頼む、その信仰によって人を救う神の力が働きます。

第六、最後に、「栄光のうちに上げられた」とあります。イエス様が昇天されたことです。天におられる父なる神が、キリスト・イエスであれば受け入れるということを示しています。イエス様が、「義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。(ヨハネ 16:10)」と言われました。天には、イエス様と同じ義を持っていなければ入ることができません。しかしキリストの内にいる者は、神はキリストにあって私たちが天に導き入れてくださいます。

2A 信仰からの背教 1-5

この真理に対して、信仰から離れる者たちが出てきたというのが、次の章の話題となります。

1B 惑わしの霊 1

1 しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。

今、読みましたように、キリストの働きは神の御霊によって、確かに真理であることを人々に確認させます。その同じ御霊が、惑わす霊、悪霊の仕業が後の時代に活発になることを伝えています。そして、人々が信仰から離れるようになるのです。そして、それは既にパウロの時代に、その兆しがありました。「背教」とも訳せる言葉であり、「意図的に、前に持っていたものを捨て去る」という言葉です。信仰を捨てるのですが、英語ですとこの前に定冠詞“the”があります。これは、単に信仰が後退してしまったことを意味せず、イエス・キリストご自身の真理そのものを否定、そこから離れることを意味しています。

「御霊が明らかに言われる」とあり、何か分からないような、暗示しているようなことではなく、はっきりと語られているということです。イエス様がそのことを、明らかに語っておられました。「マタイ 7:15 にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。」ペテロも第二の手紙ではっきりと語り、ユダの手紙にも偽教師の存在があります。そして使徒ヨハネも手紙の中で、はっきりと偽の教えを語っています。したがって、教会と呼ばれるものの中でイエス・キリストの教えから離れる動きが出るということです。そしてこのエペソにある教会でそのことが起こることをパウロは予期して、長老たちに語っていたのです。「使徒 20:29-30 私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中にはいり込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。」

時の初め、人を神が造られた時も惑わす霊によって、人は罪を犯しましたが、時の終わりに近づくとつれて、惑わす霊が動いていきます。イエス様が偽預言者について語られた時も、ご自分が再び戻ることを意識されて語られました。「マタイ 7:22-23 その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』」そして、世の終わりの時には、「にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします。不法がはびかるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。(マタイ 24:12)」と言われました。パウロはテモテへの手紙第二において、終わりの日が困難になること、また終わりの日に人々が好き勝手に、都合の良いことを聞くために教師を集めることを話しました。

そして、その背後に悪い霊の存在があります。使徒ヨハネが、肉体を神が造られたことを否定するグノーシス主義者について、このように話しました。「1ヨハネ 4:1-3 愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。人となって来たイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。それによって神からの霊を知りなさい。イエスを告白しない霊はどれ一つとして神から出たものではありません。それは反キリストの霊です。あなたがたはそれが来ることを聞いていたのですが、今それが世に来ているのです。」

2B 感謝して受け取るもの 2-5

2 それは、うそつきどもの偽善によるものです。彼らは良心が麻痺しており、3a 結婚することを禁じたり、食物を断つことを命じたりします。

その背教の教えは、善いもののように偽る、偽善の形でやってきます。だから、惑わされるし、気をつけなければいけません。パウロは、他の教会への手紙でそのことを話しました。「2コリント 11:13-15 こういう者たちは、にせ使徒であり、人を欺く働き人であって、キリストの使徒に変装しているのです。しかし、驚くには及びません。サタンさえ光の御使いに変装するのです。ですから、サタンの手下どもが義のしもべに変装したとしても、格別なことはありません。彼らの最後はそのしわざにふさわしいものとなります。」

そして「良心が麻痺しており」と言っています。ここの「麻痺」という言葉は、アイロンで自分のからだをやけどさせ、焦がしてしまい、ついに無感覚になってしまう状態を指しています。パウロは、テモテへの手紙で、「良心」という言葉をたくさん用いています。1章5節では、「この命令は、きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから出て来る愛を目標としています」と言い、1章18節には、「信仰と正しい良心を保ち、勇敢に戦い抜くためです」と言っています。この良心が麻痺してしまうほど、つまり罪意識を感じないほどにまでなってしまう、平気で真理に反することを故意に教えていくことを言います。偽善というものは、「実際はそうではないのに、そのふりをする」ということです。

私たちは、初めは良心の痛みがあるのですが、人に対しては仮面をかぶって、それで言っていることと、やっていることが異なっていることを選ぶと、その時点で良心の痛みが悪い意味で弱まってきます。これは恐ろしいことで、いつしか麻痺してしまうのです。

そして、その内容ですが、「結婚することを禁じたり、食物を断つことを命じたりします」ということです。つまり肉体に対する活動は汚れたものとみなすことであります。このことによって、より霊的になっていると誇っている者たちがいたということでもあります。肉体と霊を分けてしまうこと、この霊肉二元論が、当時、グノーシス主義という異端の中で広まっていました。このことは、イエス様が肉体を取られたということを否定します。神は肉体のことには関わらない、と見えています。しかし私たちが今、敬虔の奥義として見たように、神は肉体を取られたのです。肉体にいる私たちと一つとなられることによって、この肉体において聖霊によって動いてくださり、私たちを救ってくださるのです。

ですから、神は結婚や食事のように、肉体の活動を祝福されます。結婚についていうならば、もちろん創世記 2 章にある、男と女が一心同体になるというところで、神は祝福を与えられました。

そして食物ですが、何かを断つことを命じているということは、この偽りの教えは、グノーシス主義のギリシヤ思想による異端のみならず、律法によって救いを得ようとするユダヤ主義も交じっていることが分かります。果たして、こうした外側のことで敬虔、神に近づくことができるのでしょうか？パウロはこれを、「幼稚な教え」と言っています。「コロサイ 2:20-23 もしあなたがたが、キリストとともに死んで、この世の幼稚な教えから離れたのなら、どうして、まだこの世の生き方をしているかのように、「すぎるな。味わうな。さわらな。」というような定めに縛られるのですか。そのようなものはすべて、用いれば滅びるものについてであって、人間の戒めと教えによるものです。そのようなものは、人間の好き勝手な礼拝とか、謙遜とか、または、肉体の苦行などのゆえに賢いもののように見えますが、肉のほしいままな欲望に対しては、何のききめもないのです。」このような教えが魅力的なのは、賢いもののように見えるということです。しかし、主は聖められる方法は、イエス・キリストへの信仰のみなのだを教えています。この方が死なれた時に自分も古い人に死に、よみがえられて、死に打ち勝つようにしてくださいました。

3b しかし食物は、信仰があり、真理を知っている人が感謝して受けるようにと、神が造られた物です。4 神が造られた物はみな良い物で、感謝して受けるとき、捨てるべき物は何一つありません。5 神のことばと祈りによって、聖められるからです。

人を聖めるのは、信仰により、しかも真理に対する信仰によります。この本質があって、それで食物は感謝して受け入れるようにしなさいと主は命じておられるのです。イエス様はたくさん食べられました。神に感謝を捧げてパンを裂かれました。こうやって、主の御名によって食べる時に、それ自体が神の栄光を表すことになるのです。「1コリント 10:31 こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。」

そして、「神が造られた物はみな良い物で、感謝して受けるとき、捨てるべき物は何一つありません。」と言っています。初めに神が天地を造られた時に、「よしとされた」と言われました。これが基本であります。そして、ユダヤ人の食物規定がありました。イエス様は、内から出てくるものが人を汚すのであり、外から入るものはトイレに流れると言われました。こうして、汚れたものというものは、ない、ということでした。もちろん、衛生上、健康上、食物を断つことはよいでしょう。しかし、霊的には、何かを断つことによって向上するのではないのです。

そして、本質を教えてください。「神のことばと祈りによって、聖められるからです。」であります。神の言葉の中にいること、そして祈りの中にいること、この二つによって人々は聖められるのです。多くの人がそれ以外のことをして、聖められようとしています。それがどんなに善行のように見えても、私たちが聖めることはないのです。神のことば、そして祈りによって聖められ、それで、食べることについても、私たちはあたかも礼拝をするかのように、聖なる行為を行なっていると言えるのです。